

2020年1月7日(火)

経営史応用研究 詳細シラバス

平野恭平

講義のテーマ・目的

この講義では、日本経営史を主たるテーマとして、各産業・企業の競争や経営のあり方とその変質を検討します。この講義では、日本経営史の基本的なトピックスを理解することに加えて、大きな歴史の流れを捉えることを重視します。主な産業・企業の競争や経営の共通点と相違点、時代とともに変わる競争や経営のあり方などを学びながら、企業経営の歴史に対する理解を深めることを目標とします。

講義スケジュール

第1回(1月18日)

- ・前半：ガイダンス、歴史的視点、経営史の方法

歴史的視点の意義を考えた上で、経営史とはどのような学問であるのかを考えます。経営史とは、単に歴史の対象として企業やその経営活動を取り上げるだけなのでしょうか？経営史の創始者N・S・B・グラスは何を意図していたのでしょうか？それらの問いを考えることから始めます。

- ・後半：江戸時代の経営、明治の企業家活動

幕末から明治にかけて、東京や大阪では、新時代のビジネス・チャンスをつかもうと多くの企業家たちが躍動していました。彼らは、どのような人々であったのか、何を為そうとしたのか、いくつかの類型に分けながら考えてみます。また、彼らの企業家活動を支えるものは何だったのかについても考えてみます。現代の日本は他国に比べると起業家が少ないともいわれますが、明治期と比べた時、どのようなことがみえてくるのでしょうか？

第2回(1月25日)

- ・前半：近代産業の勃興と経営

近代産業の代表例として紡績業を取り上げ、技術移転と経営管理という2つの面から経営発展を考えることにします。前者では、適正技術の視点から近代技術の移植を捉える必要があります。後者では、労働者を多用するための労務管理の重要性を考える必要があります。近代産業が発展を遂げていくには、マネジメントの力が重要でした。また、紡績業では早い段階から自社の強みを踏まえた経営戦略の分化もみられており、この点についても検討を加えてみたいと思います。

- 事例：大阪紡績、鐘淵紡績、尼崎紡績

- ・後半：財閥の多角化と組織

A・D・チャンドラーの「組織は戦略に従う」という有名な命題があります。日本のビッグビジネスの代表格である財閥についても、この命題は成り立つのでしょうか？この他にも

チャンドラーは経営者資本主義として経営者・管理者の重要性を説きましたが、財閥経営でそれはどのように実現されたのでしょうか？大財閥の検討を中心としながらも、破綻した中小財閥の考察も交えることで理解を深めます。

→ 事例：三菱財閥，三井財閥，鈴木商店

第3回（2月8日）

・前半：戦前の技術導入と研究開発

明治期より、技術進歩の早い電気機械工業では、外国企業との提携を通じて技術開発能力を高めようとする動きがみられました。日本の技術発展の歴史を振り返ると、外国からの技術導入が果たした役割が極めて大きかったことは否定できませんが、それだけでしょうか？日本企業の取り組みを中心に考えることにします。また、関連事項として、戦前の日本への外国企業の進出の概観も説明したいと思います。

→ 事例：東京電気，芝浦製作所

・後半：日本企業の海外進出

日本企業の海外進出は戦前からみられましたが、1930年代以降の日本の帝国主義と深く関わることもあって、あまりよいイメージがもたれず、マネジメントの意義が軽んじられる傾向がありました。しかしながら、貿易商社は、日本の産業発展のために巧みな海外進出と現地経営を行っており、大きな成果を上げていました。また、中国に進出した紡績企業にも日本式の現地経営で成果を上げる例がみられました。戦前の日本企業の国際経営について帝国主義的な視点ではない捉え方を検討します。

→ 事例：内外綿，日本綿花，東洋棉花

第4回（2月22日）

・前半：日本的雇用システムの形成

第1次世界大戦前後から、サラリーマンといわれる人々が登場するようになりました。その登場の背景には、希少なスキルをもった人材をいかに獲得し、長く働いてもらうかを考える日本企業の人事管理がありました。そのような人事管理の一端を説明します。加えて、戦前日本の実業教育制度と高等教育制度の変遷も追いつつ、経営学研究科・経営学部の歴史にも光を当ててみたいと考えています。

→ 事例：日立製作所，神戸経済大学

・後半：都市化・洋風化と新ビジネスの誕生

第1次世界大戦頃からみられた産業社会化と都市化は、日本に新しいビジネス・チャンスをもたらしました。日本にない製品やサービスを提供する新しいビジネスを手がけた企業家たちは、どのような方法で市場を切り開いたのか？両大戦間期に現れた大衆消費社会とはどのようなものでしょうか？製品とサービスのそれぞれで事例を考察します。

→ 事例：阪神急行電鉄，壽屋，森永製菓

第5回（2月29日）

・前半：重化学工業化と新興コンツェルン

第1次世界大戦以降、日本でも重化学工業化が大きく進展します。電力業に牽引される形で

電気機械工業、電気化学工業、電気精錬業といった産業が成長を遂げていきます。リスクを取ることを恐れずに新産業の勃興に賭けた企業家たちの活動とコンツェルンの形成過程を追います。これまでの復習も兼ねて、明治期の企業家たちとの違いや、三菱や三井のような大財閥との違いも検討します。また、重化学工業化は戦時期にもかかってくるため、戦争と企業活動についても取り上げたいと思っています。

→ 事例：日本窒素肥料，日本産業

・後半：戦後の経済民主化と企業変革

財閥解体、労働民主化、農地改革を主要な柱とする経済民主化は、戦後の社会経済に大きな変化をもたらしました。戦前から戦時期を経て戦後に至る過程は連続説と断絶説で見方が違うことにもなりますが、連続と断絶のバランスの中で捉える必要を感じます。戦後の経営史に入っていくに際して、戦後日本経済の出発点からみつめ直します。また、激動の時期にあって、新しい時代の競争を作り出そうとした企業家がいたことにも注目します。

→ 事例：川崎製鉄

第6回（3月14日）

・前半：日本的生産システムの形成

日本的生産システムの代表的存在としてトヨタ生産システムを取り上げます。トヨタ生産システムが形成されるまでには、日本企業の経営者や技術者たちによる試行錯誤や努力の痕跡がみられます。戦時期の航空機生産、さらには戦前の紡績企業でみられた生産システム構築の挑戦にまで遡ります。アメリカとは違った歩みをみせた日本の生産システム形成の歴史を明らかにします。

→ 事例：トヨタ自動車

・後半：大衆消費社会の到来

高度経済成長期、大量生産と大量販売を結びつけて総合家電メーカーを目指した企業家もいれば、独創的な商品を創り出し、新市場の開拓を試みた企業家もいました。一方、優れた技術をもちながらも、それを生かせず競争から落伍していく企業もみられました。高度経済成長を振り返りながら、それらの企業の競争を検討したいと考えています。

→ 事例：松下電器産業，ソニー，神戸工業

第7回（3月21日）

・前半：流通のイノベーション

林周二の『流通革命』で主張された流通業の変革は、高度経済成長期にスーパーが台頭する中で実現されたのでしょうか？高度経済成長期のスーパーの台頭に続き、コンビニエンスストアが登場し、新たな主役として成長していくこととなります。伝統的な流通・小売業や百貨店から、スーパーやコンビニエンスストアへと移り変わっていく日本の流通・小売業の変革を追うことにします。

→ 事例：ダイエー，セブンイレブン

・後半：日本的経営とその変容，社史・企業史料・産業遺産

日本経済のパフォーマンスとともに評価が大きく浮き沈みすることになった日本的経営の歴史を振り返ります。また、ここまで講義で取り上げた経営史研究で用いられる社史、企業

資料，産業遺産なども紹介します。これらの史料がもつ価値と意義を正しく理解してもらい，史料を利用する側と，史料を作る側・残す側の相互理解を図りたいと考えています。

第8回（3月28日）

- ・ 期末試験

教科書

- ・ 特に指定しません。

ただし，基本的な講義の流れは，宮本又郎・岡部桂史・平野恭平編『1からの経営史』碩学舎，2014年に則って構成しています。

参考文献

講義で取り上げるトピックスの主要な参考文献や関連文献は，毎回の講義で知らせます。講義全体を通じての参考文献としては，下記のことを挙げておきます。

- ・ 宮本又郎・阿部武司・宇田川勝・沢井実・橘川武郎『日本経営史 江戸時代から21世紀へ』新版，有斐閣，2007年。
- ・ 宮本又郎・岡部桂史・平野恭平編『1からの経営史』碩学舎，2014年。
- ・ 経営史学会編『日本経営史の基礎知識』有斐閣，2004年。

成績評価

- ・ 期末試験 100%（持ち込み不可）